

38【街の散策からの気づき発見】

内牧公園散策

会員 K.T.

内牧公園(春日部市内牧3090番地)を散策している。子供達が小さいころ遊びにきたことがある。おもえば、ずいぶんと昔になる。現公園は、面積約8.8ha(88,000㎡)東京ドーム(46,755㎡)の1.9倍、総合公園として綺麗に整備されている。

古代の住居等をみると、春日部市の地には、古代から人が住んでいた地と実感する。春日部郷土資料館の資料によると、「(前略)春日部の地に人々が住んだ痕跡が残るのは、およそ3万年前の後期旧石器時代のことになります(西金野井・風早遺跡)。内牧・坊荒句遺跡でも、約2万5千年前の石器が発見されています。その後、縄文時代には大宮台地上に内牧・坊荒句遺跡と坊荒句北遺跡、花積貝塚が、下総台地上に西金野井・風早遺跡、西親野井・新明貝塚ほか数多くの遺跡が発見されています。弥生時代では、紀元前1世紀ごろの再埋葬が低地の自然堤防上にある倉常・須釜遺跡から発見され、人々の生活域が台地上から低地へも広がっていたことが分かります。6〜7世紀ごろには19基以上からなる内牧・塚内古墳群が築かれました。(後略)」とある。

内牧公園地域には古代の歴史が色濃く残っている。内牧塚内古墳群は春日部市指定史跡となっており、看板説明によると、「内牧塚内古墳群が築かれた六世紀から七世紀は、古墳時代後期にあたります。大型の前方後円墳が徐々に築かれなくなり、小規模な古墳が全国各地で増加します。内牧塚内古墳群は二十基以上の古墳から構成された古墳群は「群衆墳」と呼ばれ、この時期を代表する古墳の在り方です。前方後円墳をはじめとする大型の古墳は、一般的に大王や地方豪族など一部の有力者が築いたものでした。一方で、群衆墳に葬られた人々は、それらに仕えた地元の有力者とその家族であったと考えられます。このような群衆墳の広がりや、近畿地方を拠点としたヤマト政権の影響がおよんでいたことを表す遺跡といえます。平成三十一年(1956)三月 春日部市教育委員会」とある。

日本史の歴史年表によると、約6千年前の縄文時代前期、海水面が上昇し、内陸へ入り込む縄文海進が起こったという。縄文時代の関東平野には東西に2つの内海があった。下総台地の東部は古鬼怒湾、大宮台地の西部は奥東京湾で、現在の荒川低地・中川低地・東京低地にあたる。奥東京湾西の入り江は現在の川越市、東の入り江は久喜市栗橋・茨城県古河市付近まで達していた。その後、5300年前頃から海退が始まり、海だった場所が陸地になっていった。大宮台地の端にあった内牧地内は標高13m〜15mの高台にあることから、縄文時代前期頃の内牧公園の前は、奥東京湾の海が広がっていたであろう。その後の海退とともに、古代の人々は、台地から低地へ生活域を広げていった、と思われる。

日本史年表を参照すると、諸説あるも、「旧石器時代(約3万年前)―縄文時代(約1万2千年前〜2500年前)―弥生時代(紀元前5世紀〜3世紀半ば)―古墳時代(3世紀半ば〜7世紀頃)―飛鳥時代(592年〜710年)」となっている。散策しながら、現地で現場の風景に立ち、古代史を振り返ると、歴史の中の人々からの声が聞こえてきそう。妄想ではあるが、『古代、縄文人と弥生人のせめぎ合いがあったであろう』、と思う。さらに妄想を膨らませ、『古事記』にある「国譲りの神話」は、縄文人と弥生人の土地をめぐる話ではあるまいか。』等と、空想の中で遊んでみた。春日部市の地には、古い遺跡がある。日本史年表の旧石器時代後期・縄文時代・弥生時代・古墳時代まで、古代の人々が住んだ痕跡が残っているのは貴重なことだ。



内牧公園マップ



古代の住居



古代のくらし看板



内牧サイクルロード



内牧古墳群碑



内牧古墳看板